

岩槻城跡を探る

第6調査室 南の備え 新曲輪

調査レポート① ひょうたん 瓢箪から駒? こま 障子堀「発見」 しょうじぼり

1995年（平成8年）3月、新曲輪と鍛冶曲輪の間の堀で行われた発掘調査で、堀底から堀障子が発見されました。堀障子は、堀底を横断して構築された障壁（しょうへき）のことです。堀障子を伴う堀のことを障子堀といい、戦国時代の関東では、小田原の北条氏の城郭を特徴づける城郭遺構として著名なものです。

かつて岩槻城の新曲輪部分は、当初の築城地ではないか、との見方もあったようですが、その後の検討・研究の積み重ねによって、戦国時代末期に、豊臣秀吉の襲来に備えて北条氏が行った岩槻城大改修の中で構築されたと考えられるようになりました。この障子堀の発見は、そうした見方を裏付けることとなりました。

この時の調査では、堀障子1基を確認するにとどまりましたが、その重要性を踏まえ、障子堀を市民の皆さんにもわかりやすく伝えることを目的として、障子堀の模式的復元整備を行うこととなり、調査範囲を拡張して同年8月から10月に再度発掘調査が行われました。3月の調査と合わせて3基の堀障子を検出し、新曲輪部分の障子堀の具体的な構造を明らかにすることにつながりました。

この一連の発掘調査は、新曲輪部分に保存されている遺構に関する情報収集を目的として、具体的なターゲットとしては堀障子の確認を目指したものでしたが、実際に調査実施に踏み切るには、上記のような検討・研究の成果の他に、もう一つの「物証」を得たことがきっかけとなりました。それは、堀底で行った地下レーダー探査によって、堀底に堀障子が所在



図1 発掘調査（○）と地下レーダー探査（○）の位置

する可能性が指摘されたことです。

この1995年当時、埼玉県指定史跡である新曲輪部分（指定名称は「岩槻城跡」）の保存・管理の指針を定めるために、「保存管理計画」の策定が進められていました。その過程で、堀の構造などを確認するために、新曲輪の南端にある堀底で地下レーダー探査が行われたのです。その結果、堀底に堀障子の可能性のある探査結果が得られました。堀底は、現在の堀底面から1.5m程の深さがあり、そこに中心間で6m前後の間隔で堀障子と思われる高まりを示すデータが得られたのです。高まりの高さは80cm前後でした。

この探査結果をうけ、その重要性に鑑みて、発掘調査を実施して堀が障子堀構造であることを確認することになりました。予想以上に堀の埋没が浅いとみられることも、調査に踏み切る条件でもありました。

調査実施にあたっては、レーダー探査で得られた高まりの間隔を踏まえ、最低でも1基の堀障子を確認できる調査区として、6mの長さの調査区を設定しました。あわせて堀の埋没の状態や堀底から土塁までの断面などの調査も行うこととして、堀を横断するトレンチなども設定しました。調査の実施場所は、作業の効率と安全管理などを考慮して、レーダー探査を実施した新曲輪南端の堀ではなく、新曲輪と鍛冶曲輪の間の堀としました。なお、作業は全て人力で行うこととしました。

こうして、発掘調査が始まりました。堀底が1.5m、堀障子（と思われる高まり）の高さが80cm前後だから、70cmも掘れば、その上端部が出てくるだろう・・・そんな皮算用をしながら堀底を掘り始めてみると・・・なんと、なんと！あにはからんや、表

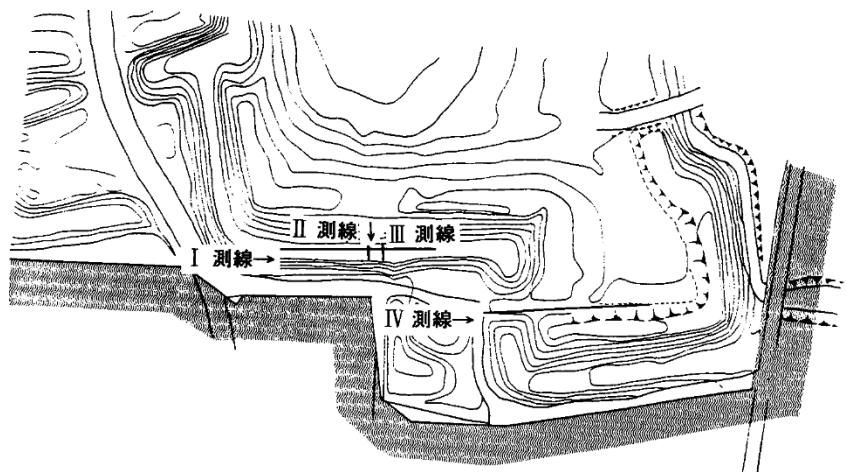


図2 地下レーダー探査の位置 ※文献1より

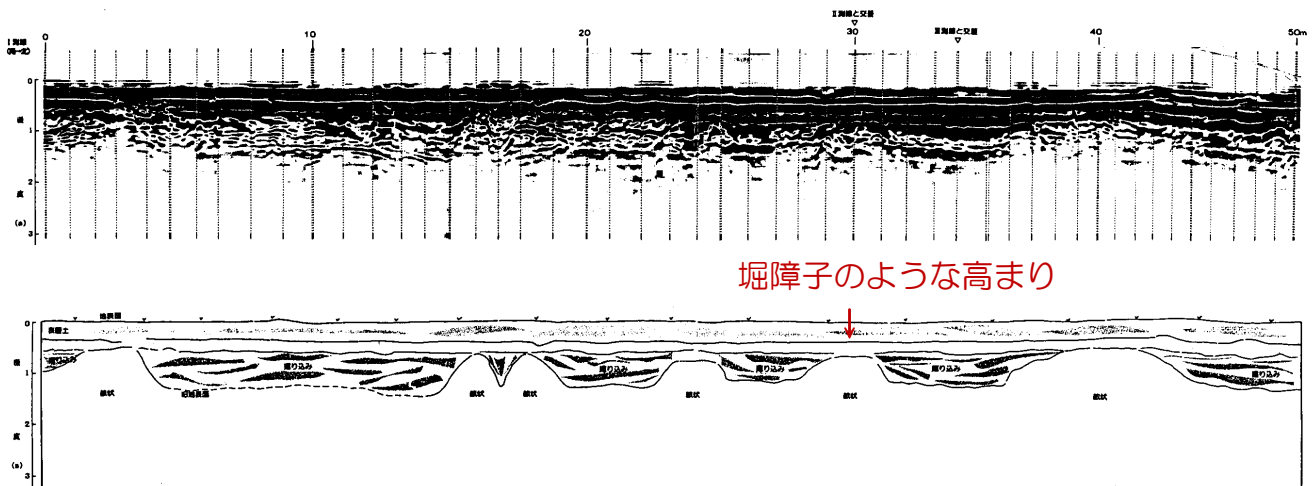


図3 地下レーダー探査結果（測線 I） ※上段：レーダーによる波形 下段：その解釈

層の土のすぐ下には、関東ローム層が現れました。関東ローム層は数万年前に火山灰が降り積もって形成された基盤層。これが出てきたら、もう堀底ということになります。??を頭の内外にふりまきながら、その上面を広げてみると、(再び)なんと、なんと！そこに掘り込まれた数々の穴。しかも、スナック菓子の袋や缶ジュースの空き缶などが入り混じっています。その穴は深いものは 80 cm もありました。その上、関東ローム層と思えた土は、自然状態のものではなく、混じり気のない関東ローム層による厚い埋め立て土、それがガチガチに固められていたのです。

予想外の事態に驚愕、ついで困惑しながらも、諸々のことを考え合わせてみた結論は、地下レーダー探査ではこの固い埋め立て土とそこを掘り込んだ新しい穴による絶妙な起伏を堀底とそこに構築された堀障子のような高まりと捉えてしまった、というものでした。この周辺の堀の新曲輪側の壁面には、太平洋戦争末期の 1945 年（昭和 20 年）に掘られた軍需関係の防空壕が数多くありました。どうやら、堀底かのように思えた関東ローム層由来の土は、防空壕を掘った際に、排出土の処理と防空壕へのアクセス路整備を兼ねて、掘り出したローム土で堀を埋め、しっかりと固めたもののようでした。調査は完全に失敗した、かに思えました。

しかし、この程度のことではあきらめるわけにはいきません。安全に十分配慮しながら、最低でも本来の堀底を確認し、堀の規模を把握することに調査の主眼を切り替え、調査を続行することにしました。

結果的に、1945 年から 1995 年までに堆積し、公園利用の中で踏みしめられた層と、関東ローム層の土による埋め立て土層は、合わせて 1.3m 程の厚さがあり、それを取り除いたところでようやく、1945 年の埋め立て直前の堀底面が現れました。そこから本来の堀底までは、さらに 1.4m 程度の厚さで土が堆積していました。結局堀は、当初の見込みの倍以上、3 m 近く埋まっていたのです。



図4 新曲輪部分の堀で見つかった1基目の堀障子

堀を横断するトレンチを設定した北側を優先して掘り進め、念のために当初設定したトレンチ内全体で堀障子の有無を確認しようと、南側の掘削も始めたところ、すぐさま堀障子の上端部が現れました。最終的に調査できた幅は 80 cm 足らずでしたが、この部分の堀が障子堀であることを確定し、さらに堀底の掘り残しによって堀障子が造出されたこと、そして堀障子の規模を把握することができました。

この結果を踏まえて、堀障子の配置間隔を確認することも目的として、同年の 8 月から再度発掘調査が行われ、合わせて 3 基の堀障子を検出することができました。

その詳しいことは、また改めて紹介しますが、ある意味特殊な埋没状態であったことによる地下レーダー探査の誤認を発端として、結果的に目的どおりの成果を得た発掘調査、正確なたとえではありませんが、「瓢箪から駒」の障子堀「発見」だったわけです。

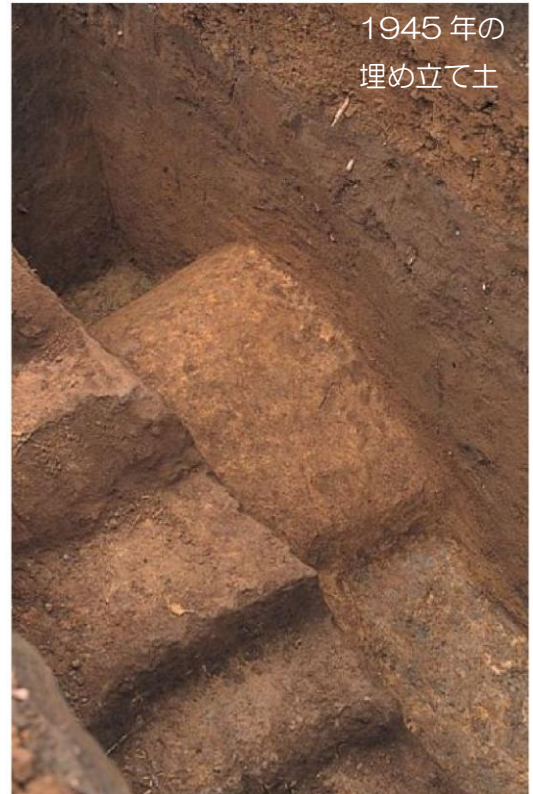


図5 別角度から
※左手の段は作業用の階段

おもな文献

- ・文献番号、執筆者、書名または論考名、(掲載書)、発行者、刊行年の順で紹介します
- ・文献の配列は、本文で言及したものを先に掲げ、その後は刊行年順に配列しました。
- ・文献番号を太字にしたものは、さいたま市立図書館が収蔵している図書です。所蔵館は、さいたま市図書館ホームページにて御確認ください。

- 1 岩槻市教育委員会『埼玉県指定史跡岩槻城跡保存管理計画書』 同 1995 年
- 2 小林照教ほか『岩槻城関連遺跡群発掘調査報告書 2 -埼玉県指定史跡岩槻城跡・鍛冶曲輪周辺地区-』岩槻市文化財調査報告書第 19 集 岩槻市教育委員会 1997 年
- 3 新井浩文ほか『岩槻城と城下町』いわつき郷土文庫第 3 集 岩槻市教育委員会 2005 年
- 4 さいたま市立博物館・浦和博物館『戦国時代のさいたま -城と館からさぐる-』さいたま市・岩槻市合併記念事業特別展図録 2005 年